
絆 3 ~ 禍束編 ~

佳生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絆3 ～禍束編～

【Nコード】

N6612E

【作者名】

佳生

【あらすじ】

死神と呼ばれる殺人鬼。殺人鬼に狙われる狂愛者。そんな彼等に
出来上がる、血の繋がらない、『かぞく』の物語。

01：死神の家族その1

むしゃくしゃしていた訳じゃない。

ただなんとなく、そういう事をしてみたいなあ、と思っただけで、特になんの意味もない。

むしゃくしゃしていた訳じゃない。

ただ。ただ……やってみたいと、思っただけ。

「ちょっと君！ 君、今、鞆に何入れたのかな？」

速攻アウト。笑顔の若い店員に捕まってしまった。

「ちょっとこっちに来てくれないかな」

「あ、いや……すみません」

「すみませんじゃなくて。ほら」

ぐいつと腕を引かれて、少しばかり抵抗したけれど、事が大きくなっ**て**は困る。

まあ、若い人だし、それなりにお金を出せば見逃してくれるだろ

うな。

と、思って、溜め息まじりに彼についていこうと思ったら。

「ああ、すんません！ ほら、お前も。俺が外にいたんで、外に来ちゃったただけだよな、はい、お代」

知らない人が。何か、白い髪の人が僕の目の前で笑ってる。この人、なんで俺の知り合いみたいな顔してるんだろう。

コンビニから引つ張り出された俺は、その白い髪の人に手をひかれたまま、ずっと歩く。どこまで俺の手を引いていくつもりなんだか分らなかったけれども、振りはらう気にはなれなかった。気分的に、そんな感じだった。

「お前さあ、やるならもつと気合い入れてやれよ。あんなバレて当然って取り方すんの、やめてくんね？」

なんて言いながら、俺の手は離さないこの人。そろそろ誰かに助けを求めた方がいいんだろうか。

「つつかさあ、お前何やりたかったわけ？ あれか。魔がさしたのか？ 受験勉強大変なのか？」

「別に……受験勉強は別に問題ないっす」

勉強に関しては苦勞した記憶がないから。苦勞してるのは、それ以外のことです。

「はいちまえよ、俺、聞いてやるから」

「いや、別にいいんで……てか、放してくださいっす」

「ここで放したら、お前また同じことすんじゃねえの？」

「しないっすよ」

どうだろう。やっぱり気分でするかもしれない。天からのお告げがあったりしたら、躊躇なくやると…と思う。俺って結構危ない奴だよな、なんて思うこともしばしば。

そんな俺を引っ張ってるこの人は普通の人なのかどうか……うむ。頭白い当たり違う気がする。見た感じ若い人だし。ぶっ飛んでるって言うんだっけか？ それとも風変りな人ってことか。

「茶でも、飲んでかね？ 結構俺の部屋面白いと思うんだけどなあ」

「はあ」

家に帰ってもすることないし。まあ、いっかな。知らない人につ

いていつちゃダメだって言われてるけども……まあ、いつか。

ついてきてしまった彼の家。それは、どこをどう行ってたどり着いたのか分からないけれども、路地裏の裏の裏ぐらにある、死ん

だみtainな建造物群の中だった。こんなところあったんだ、と思うようなところ。

その中の一つに入って、驚いた。

「はい、どうぞ」

外の閑散とした雰囲気とは真逆。新築同様の近代設備にあふれた一軒家になっていた。罅割れは見られないし、隙間風が入ってきて寒いとも思わない。しかも広いし二階もあるっばい。

どうなってるんだ、この家。

「あ？ 紅茶派だったか？」

白髪の知らない人に言われて、ようやく俺は自分の目の前に出されたコーヒーに気がついた。

「いや、ココア派っす」

「マジかよ」

笑われた。

いひひひ、と笑っている知らない人。結構格好いいのにその笑い方はないだろう。いや、なればいい味出して聞こえるんだろうか。

「じゃ、これ。ココアな。ホットミルクあるから自分で混ぜて」

「すみませんっす」

知らない人んちで何やってんだか、俺。

「ああ、そうだ。俺、春日野 かすがや 名鷹 なたか。お前は？」

「俺は……莉菅原 りすがわら 遠夜 とよや っす」

「リス？ はあん。リスな。分かったよ、お前、今日からリスな」

今日からって、もう会わないと思うんですがね。てか、中坊捕まえてリスはないと思います。リスって、もう少し、かわいい女の子につけてあげるべきだよ。かわいい子って……思い浮かばないけれども、とりあえず俺見たいのにつける名前じゃない。

「……」

すする程度にココアに口をつけてみる。

どうしよう、怪しい薬とか入ってたら。いきなり眠くなって、目が覚めたら、なんか機械化されてたりして。改造されてたらどうしよう。……あゝ、ちよっと、かっこいいかも。

しかも、なんか、ココアうまいし。惚れそう。

.

02：狂愛者の同居人

なんだか分からないけれど、今日、僕たちのルームに新しい人が来るらしい。全寮制である僕らなんだけれども、そもそもこの学校にこの時期に編入生なんて珍しい。

どんな子だろう。どんな人かな。怖い人じゃなかったらいいんだけど。

「……」

朝のホームルーム。編入生が来るから、久しぶりに先生が朝からやってきていた。音もなく開く扉。あれって力加減間違うと、すごいもの凄い音するんだよね。

同じ家になるんだと思ったら、急にドキドキしてきた。女の子だったらしよう。部屋から出てこれないよ。

そんな事をぐるぐる考えてたら、急にクラス中に歓声が響いた。今までにない感じで。かわいい女の子だったら男子の、かつこい男の子だったら女子の声のはずなのに。今回は両方だった。

恐る恐る顔を上げてみると。

「斜透字 鳶です。よろしくお願いします」

棒読みだった。無表情だけれども、びっくりするくらい綺麗な姿かたちの……たぶん、彼。制服が男子用だから、きっと男の子のはず。そうじゃなかったら、僕がびっくりするんだけれど。

伏せがちな目と、長すぎる黒の前髪。制服が似合うつていいな、と思いながら、僕のななめ前に座った彼の背中を見る。細い人だ。

でも、なんだか怒っているような顔をしているから、話しかけずらそうだな。

そう。朝会った時には、話すらそうだって思ったんだけれど。

「そっか。君がこの家の人だったんだ」

「僕の家って、訳じゃないんだけどね。あ、僕、代四宮^{よしのみや} 犬居^{いぬい}。多分、もう一人帰ってきてると思うよ」

鞆から鍵を取り出して、鍵穴に差し込む。新しい家だから、なんなくロックは解除されて、玄関を開ける。

あの子が一人でいる時に限りだけれど、家に人がいても鍵がかかっている。用心深いというか、警戒心が強いというか。たぶん、ロタと遊んでるんだろうなあ。それとも新聞の切り抜きでも作ってるかな。

鳶^{とび}くん^{くん}に驚かなきゃいいんだけど。

「ただいま〜！」

僕が家の奥へ呼びかけると、正面の扉から、ちゃこちゃこと足音をさせて、僕の愛犬、ロタが走ってきた。その後に続いて、同居人

の人も出てきたんだけど、鳶くんの姿を見るなり、肩をはね上げて奥へと戻ってしまった。

「可愛いね」

そう言ってほほ笑んでくれた鳶くんだったけれど、誉められた口タの方は、何が気に入らないのか、尻尾を丸めて僕をせかす。

「ごめんね、何か」

「いや、いいよ。僕が知らない人だから警戒してるだけだろうし。すぐに慣れてくれるよ」

「あは！ そうだよね！」

最初は近寄りがたい感じで、無表情だった彼だけど、学校を出た瞬間から優しい表情になる。学校嫌いなのかな。……僕だって、好きな訳じゃないんだけどね。

「あ、そうだ。ここ、もう一人いるんだ。……ミヨン！」

出てきてくれるか微妙だけれど、一応呼んでみる。そしたら、奥の部屋の扉から、顔だけ覗かせて、何とも表わしがたい表情でこっちを見つめてきた。

「ミヨン、この人が先生が言ってた人。斜透字 鳶くん」

そう、僕が名前を教えたら、珍しく自分から人前に出てきた。学校だと普通に目立たない感じの子なんだけれど、ひとたび自分の家、というか自由にできる場所に帰ってくると、居留守を使っても人とは顔を合わせない。

「どうも」

鳶くんが笑顔で言うと、ミヨンは家着のラフな姿で小さく頭を下げた。

「あたし、貫思つらぬし 水脈みお。……よろしく」

小柄でも大柄でもない彼女だけれど、男性で言えば標準の僕と、そんな僕より少し身長のある鳶くんの間だと小さく見える。

「挨拶も終わったし……あ、鳶くんの部屋教えてあげる。荷物とか届いてるよ！ 配置は言われたとおりにやっておきましたって」

「ああ、そうなんだ」

そうして僕とミヨンとロタ。三人で彼を連れて二階の個人部屋へ
と行く途中、彼が言った。

「そうそう、今日の夜、二人に紹介しないといけない人がいるんだ。
二人と、あと一人」

「そうなの？」

ちよつと嫌そうな顔をしたミヨン。

「僕、ちよつと訳ありで。その人達にあつてから、友達になるかど
うか決めた方がいいかも。あ、友達になりたくなかったら、僕はど
うとでもするから。顔は合わせないようにするとか、そんなこと程
度だけど」

笑顔のままで言われても、僕の心は酷く冷える。なんだろう、そ
ういう訳ではないのに、怖い。悪い事をしてしまったような気にな
る。

「大丈夫だよ、そんなこと言わないでよ」

「いめん」

そうして僕は彼の部屋の前で、鳶くんを道に譲る。この家の誰一人として、まだ彼の部屋を見たことがない。どんな部屋か気になる反面、見ていいのか悪いのか分からない。

「……えっと」

ドアノブに手をかけた状態で鳶くんが苦笑している。どうやら見られたくないようだ。

「ごめん。見せたくない」

苦笑を返した僕と、期待するように舞っていたミヨンにそう笑いかけて、彼ははっきりと拒絶した。

そうされると元から追及するたちじゃない僕と、自分の場所を大事にするミヨンは、無理に入ろうとはしなかった。ロタに至っては、興味自体ないだろうし。

「じゃあ、今日の夜の事、ちょっと覚えておいて」

「うん」

そんな会話をして、僕らはめいめい、部屋に戻ったり居間に行ったり。いつも通りに自由に始めた。

.

03：死神の家族その2

「嫌だっっていつてるでしょ！」

こんなちっちゃな体で、大人の男相手に勝てる訳はないのに、私は自由の利く片手を振りまわしていた。それだっって直ぐに掴まれて、ずるずると路地裏を引きずられてしまうのだけだ。

「いけません。ミス・乃選」

片手のノートパソコン。これさえなければ、私は追われることなく、囚われ同然の生活なんてしなくて済んだかもしれないのに。

でもこの手がないと、今の私はない。

「嫌！ 放して……放しなさい！」

叫んでも聞いてくれる訳はなく。小さな私は、前の黒塗りの車から降りてきた男たちにとらえられそうになった。

でも。

「やめてっって言うってんじゃない？」

それは鮮やかな赤だった。そして綺麗な白。

「放してやつてよ。俺に免じてさ」

齒を見せて笑う彼だけれども、その笑顔が信じられなく極々普通で、私は恐怖と、それとよく分からない安心感と嬉しさを感じた。私を自由にさせてくれる人なんだと思ったから。

彼は、自分の正面にいた男を刀で一刺しにしたかと思うと、私の腕を掴んでいた男の腕を躊躇いも、突っ掛かりもなく切り落とした。それから私の腕を掴み続けている手を取って、持主の男に放り投げた。

それから、恋人だとも言つように私の肩を抱いて、私が逃げようとしていた路地の奥へと歩き出す。

追ってきた男の足音があつたけれども、間近で響いた銃声と男の倒れた音を残して、他はすべて消え去った。

「どうよ、俺、格好良かった？」

あんな血なまぐさい事の後に、よくそんな事が聞けるものだとも思っただけども、私は彼の顔を見ずに答えた。

「まあまあです」

と。

崩れてしまいそうなポロビル。けれども中に入って見ると、新築のそれも広い贅沢な室内になっていた。そしてそこには先客が一人。

「お帰りっす……あ、すみません。俺、帰った方いいっすか？」

雑誌をめくっていたワイシャツの彼。寝転がったソファの下には学ランの上着が無造作に落ちていた。そして目につくのは、包帯や絆創膏の類。

「リス、ちょっとこれで女物、適当に買ってきて」

「はあっ！？　ちょ、何の羞恥プレイっすか！」

「お前、羞恥プレイとか……こんな生温いプレイがあつてたまるか！」

論点はそこなのでしょうか。

「あ。私の事でしたらおかまいなく」

と、私が手を振ると、私を助けてくれた方ではなく、寝転がって

いる方が私が私を指さした。

「でも、それは不味いっすよ。返り血とかべったりっすよ」

「白い服だっただけに目立つしな。……つか、パソコにもかかってんだけど、大丈夫なのか」

「え？ あ！」

私の服と同じく白のノートパソコンに、血がかかっていた。けれど、焦った割には、本当にかかってしまっただけで、中に侵入してしまっただけの形跡はない。

「ま、いいか。とりあえず風呂入ってこいよ。向こうのドアから出て、一番奥。タオルとか後でおいといてやるから。着替え……俺のかしてやるよ。下着は……悪いけど、こいつと買いに行ってくれ」

「ええ！？ やっぱ俺なんすか？」

「余った金、お前にやるから」

そう。結構な金額だ。紙の輪っかで止めるほどの厚さ。

「買っもんメモしてやるから」

そうしてお風呂場に追いやられた私は、気まずく思いながらもいそいそと服を脱ぐ。清潔感のある真っ白な場所。そう思った。脱衣所も、浴槽の方も。広いし、綺麗で。

最初からそうしてあったように、暖かそうな湯船。

「あ」

私の目に留まったのは、何種類も専用のラックに収めてあったシャンプーやリンスの数々だった。まるでワインのボトルを飾っているようにも思える。その中には、私が使ってみたいと思っていたトリートメントもあって、迷わずにそれを手に取る。

何日も何日も逃げていたから、ボサボサになっていた髪をぬらし、シャンプーで泡立てる。洗い流した後に綺麗な青のボトルを手にとって、蓋をあける。中身も綺麗な青色だった。

それを髪になじませるようにしていた時だった。

「バスタオルとか、戸のすぐ前においとくから」

「は、はい！」

軽い調子でまた出て行ってしまった彼。そしてすぐに、笑い声やら叫び声が聞こえてきた。楽しそうだ。

それからトリートメントを洗い流して、洗顔と体も洗う。ボディソープも何個も種類があった。どうしてこんなに並べてあるのか疑問ではあったけれども、これはこれで、毎日選ぶのが楽しそうだ。

シャワーを浴びてから、ゆっくり湯船につかる。こんなにリラックスしたのは久しぶりかな、とか考えていたら、いきなり声が。

『あ、湯加減どう？』

「きやあつー！」

バシャツとお湯が散った音が聞こえたのか、向こうから笑い声が。

『悪い、悪い。大丈夫見えてはないから。そういう機能付きなんだよ。それで、どう温くないか？ 温いなら脇のパネルで調節してくれよ。後、湯船の足側。ボタンあるだろ？ それ押したらチツせえけどテレビ出てくるから。チャンネルは……まあ、やってみればいい。わかんなかったら聞いて。赤いスイッチでこつちと話できるから』

…お風呂にこんなにこだわる人もいないような。

結局今回はテレビも赤いスイッチも押さずに、入浴を終えた。バスタオルはフワフワしていたし、彼のものだというワイシャツもズ

ボンも、一点のシミもない。本当に清潔な人だ。

そうして上がって見ると、すっかり出かける風の、学ランの彼。

「もうチョイ待てって。髪乾かすぞ」

まさかここまでしてくれるとは思っていなかった。白い髪の彼は、私を丸椅子に座らせて、近くにあったコンセントから電気をひっぱって、ドライヤーをつけた。なびく自分の髪がさらさらとしていて、軽く感動を覚える。

「あの、本当、すみません」

「いやいや。半ば強制的に誘拐してきたようなもんだしな」

笑顔で楽しそうにしながらも、彼はいう。けれども、私は正直、とてもうれしかったのだ。私は、今までの自分の人生がいやだったから。

私の髪が渴いて、上着を受け取ったとき、白髪の彼は学ランの青年に、さらにもうひと束お金を渡した。それと、メモ。

「何とか揃うだろ」

「っすね」

そんな会話をしてる二人を見ると、学ランの彼に手を掴まれた。

「さ、ぼちぼちいくつすよ!」

どこに行くのか、よく分からなかったのだけれど。

「好きなだけ買ってくださいって、名鷹さんが」

彼に連れられてきたのは、デパート。しかもかなり大きな。そしてそこにある洋服屋。かわいい服がたくさん並んでいる。

「え、そんな……悪いですよ」

遠慮する私に、彼は首をひねって、すぐそこにあつた服を手にとった。

「これなんてどうすか？」

私の遠慮を、全く聞いていなかった様子の彼。

「名鷹さんがいいつつたんすから、いいんすよ。あーゆー人なんつすから」

うんうん、とうなづく彼。だけれども、私には服の選び方が分からなかった。誰かが用意した服しか着たことがなかったから。

そしてそんな私に、どんどん服を見つくりつつ持ってくる彼。そして結果的に。

「これ、全部下さいっす」

私ではなくて、彼が頼んでしまったりして。

そんなことをしながら、三店ほどまわって、靴を見て、アクセサリーを見て。

「あの、こんき渡すんで、俺はここで待ってるんで……どうぞ！」

最終的にたどり着いたのが、ランジェリー店。さすがに男の子は入れないだろう。ドキドキしながら入って見ると、すぐに店員さんに声をかけてもらえたおかげで、思うより早く買い物を済ませることができた。荷物が多いな。そんな事を思っていたのもつかの間。全て彼が持ってくれた。

そう言えば。

「あの、お名前は……」

今更。遅すぎるけれども。

「俺すか？ 俺は莉菅原 遠夜。 名鷹さんにはリスって呼ばれてるっすね」

「ナタ力？」

「白い髪のお兄さんっすよ。 春日野 名鷹。 赤い死神とかなんとかって言われてるんす」

赤い死神。 ネットの掲示板で見たことがある。 都市伝説。 でも、私が会った時の彼は、確かに赤かった。

「死神の割に、いい人っすよ。 頭いいし」

よいしょ、と荷物を持ち直した彼は、もう一つ上の階。 生活のフロア、と書かれた階で降りて、そしてベッドコーナーへ。

「で、これで今日のところは最後なんすけども……どれがお好みで？」

「え？」

「名鷹さんが。 女の子路上にほっぽりだせないから。 むしろ家で暮らすためにっつて。 ベッド。」

「ええ！？」

「俺はっすねえ、こんなお姫様チックなのが似合うと思うんっすけど……」

やっぱり私の話なんて聞いてない。そして結局彼が勧めるまま、そのベッドを購入して、なおかつそれとともに、名鷹さんの家に帰りついてしまったわけで。

「お前のセンスは最高だ！」

「あざーっす！」

見事にコーディネートされた部屋。全ては遠夜さんのアイディアとふたりの腕力。

「三日以内に本棚とかいろいろそろえてやるから。欲しいもんあったら言つて。ああ、人形とかそういうのもいいし」

豪遊する人だな。と、思っていたら、インターフォンがなった。けれども鳴っただけであつて、その人は呼びにいかなくとも、勝手にここまで入ってきた。片手に小さな紙袋を持ったその人は、黒い長いストレートの髪をして、柔和にほほ笑んでいる。三十代ごろの、でも綺麗な人だ。

「毎度どうも。携帯ですよ」

それは私に渡されて。

「オプション、沢山つけておきましたからね。うふふ、沢山使ってください。ああ、その坊やに任せれば、一番いいかもしれませんね」

「あながとね」

くすくす笑うその人に、名鷹さんが言う。言われた彼はさらに笑みを深くして、頭を下げた。

「お礼を言うのはこちらの方ですよ。あなたのおかげで、私は大儲け。命の危険もないのですから。その感謝がお金で伝わるなら、幾らでもお出ししますよ」

そうか。あのお金の出所は彼なんだろう。

「……あの人アングラの人っすから」

こそつと教えてくれた遠夜さんに小さくうなづいて、私は彼に小袋を渡す。一瞬きよとんとされたけれども、すぐに思い当たったのか、中身を確認して言った。

「あ、明日でいいすか。今日はもう帰らないと」

それを聞いた瞬間、今度は私がキョトンとした。

「あ、こいつには家があるんだよ。暇だから遊びに来てるようなもんで」

「そうなんですか」

「そうなんすよ」

意外だった。私がこうだからといって、相手がそうだとは限らないのだけれど、純粹に以外だと思ってしまった。それはたぶん、彼の包帯のせいでもあるんだろうけれども。

「あ、そうでしたそうでした！」

と、黒い髪の人に続いて、家から出ようとした彼が、玄関先で振り返った。

「名前、聞いてないっす」

すると、名鷹さんも私を見て、ああそうだった、とうなずく。私も聞いておいて名乗ってなかった。

「私は、乃選のえるです」

「苗字は？」

「……乃選だけなんですけれど」

「へえ。ノエルね」

それ以上聞かない。聞かれても、本当に乃選でしかないから、答えられなかったんだけど。

「っすか。じゃ、また明日、乃選」

手を挙げて出て行った彼。その背中に、私の横で名鷹さんが言った。

「また明日って……ノエルにしか言っていかなかったよな、今」

「そうですね」

小さく笑いながら返して。そう、これが私があこがれていた生活の始まりでした。

.

04：死神揭示板

夜に人がくる、と言われて、正直、いい気分じゃなかった。けれども、来た人があたしの興味を引いて引いて仕方がない。

「……」

「いいのか、鳶」

「僕は構いませんよ。同じ家にいる時点で、危険は僕とおなじですから」

あたしとヌイの前に座っている人たち。エンの両隣。笑顔で口タをなでている、首にバンドを巻いた可愛い感じの人と、長身で細いカッコいい感じの人。

「護衛のようなものだ。君たちの暮らしに介入するつもりはないが……」

「ああ、そうなんですか」

苦笑しながらヌイが言う。あたし的には、どうして鳶くんが護衛されているかの方が気になる。話してくれないだろうか。

かといって、自分から聞く勇氣はない。

「自己紹介がまだだったか……俺は百合荻^{ゆりおぎ} 誇彦^{こひこ}。こいつは片岡^{かたおか}翼^{つば}」

翼というらしい首バンドの人が笑顔で頭を下げる。けれども言葉がない。

そしたら、オズオズとした様子で、ヌイが誇彦さんに言った。

「あの、もしかして、片岡さんって……声、出ない人なんですか？」

それを聞かれた瞬間の二方の反応は迅速かつ後ろめたさのないものだった。

「その通りだ。だから、ほとんどの場合は俺とこいつがペアになっている」

そうして笑顔で大きくうなづいている翼さん。不思議な感じが、声が出ないというだけの事が、とても不思議に思えた。なぜだか、彼は耳も聞こえないんじゃないだろうか、とか、目が見えないのではなからうかと考えてしまう。

「この人達に守ってもらわないと、どうやら僕はとても危険な目に

あつらしいんだ」

自身では信じていないようなら笑いを浮かべているエン。それとも余裕なんだろうか。

「俺たちが守っているといっても限界がある。どっちにしろ危険というのには変わりはない」

そういうことを言ってしまった方がいいのか気になったけれども、私は心のどこかでわくわくとしていた。危険というワードに魅かれていたのだと思う。心躍る単語だ。

危険であるとか、普通でないとか。オカルトでも、都市伝説でも、特殊任務でも、要人でも何でも。毎日繰り返すだけの人生に変革をもたらすもの。そんなワクワクとした感じの事だ。

「……どうして、危険なんですか？」

その瞬間、平静を装いながらも、私は誇彦さんを見て、そしてエンを見た。二人とも、表情を崩すようなことはない。ただ、翼さんだけが、首をひねって苦笑している。そして誇彦さんに向かって、何かを話したようだったけれども、口をパクパクとさせていたのを見ただけなので、何と言ったのか分からなかった。

けれども、そんなあたしに気がついたのか、エンが肩をすくめて

教えてくれた。

「どこから話していいのか迷うよねっていう話をしてるんだよ」

「鳶くん、今の見ただけで分かったの？」

「まあ。三か月くらいの付き合いだし……」

しまったというように、とりあえず笑みを浮かべた風のエンをはさんで、誇彦さんと翼さんが頷いたのが見えた。

「……赤コートの死神を知っているか？ 有名かどうかは分からないが、都市伝説だ」

「知ってます」

「噂で聞く程度には……」

即答したあたしと違って、ヌイは自信なさそうに視線をさ迷わせる。

赤コートの死神。丁度三か月ほど前から有名になってきた都市伝説だ。白髪の赤いコートを着た死神が、ジャック・ザ・リッパーのとき早業で、裏路地に人を引きづり込んで殺してしまうといううな話。普通なら都市伝説で終わらせてしまうようなところだが、彼は都市伝説ではない。

現実に存在しているのだ。いうなれば都市伝説のオリジナル。

「彼は、その死神に目をつけられている。今もそうだが、もしアレが鳶を殺した場合、たぶん始まるのは無差別な虐殺だ」

「……今も結構好き勝手やってるみたいだけどね」

鼻で笑うようにして、今は何も映っていないテレビ画面を見つめる鳶。そういえば、ずっとニュースを見ていた気がする。刺殺体と銃殺体が発見され、重傷者が病院に搬送されたやらなんやら。行方不明の少女の安否とも言っていた気がする。

「え、それって、鳶くんが」

「そうだね。僕がストッパーってところかな。そう、ゲームの賞金みたいな」

「なんで……」

そんな事に。あたしが一番知りたいこと。教えてほしいこと。だけれど。

「まあ、それはおいおいね」

いい具合にはぐらかされてしまった。彼はどうしても話す気はないようだ。だったら無理に追及はしないけれども。好奇心が疼くうちに聞かせてほしいものだ。

けれども、それについてはあたしも情報を持っている。彼、赤いコートの死神が、どんな規則を持って行動しているのか。ネットの噂と、サイトの状態と、新聞の事実で。話しておいた方がいいんだろうなと思ったけれども、どうもきっかけがつかめない。

「……ミオ、話したいことあるんだ？」

そう言ったのはエン。だけれども、その視線はあたし自身ではなく、少しばかり上方に向いている。肩の上のあたり。何かいるんだろうかと振り返ってみても、誰かがいるはずもなく、あたしは曖昧に笑い、その場全員の視線を受ける。

「あ、知ってるかもしれないけど」

そう切り出して、携帯のブックマークから、あるサイトを呼び出す。

「噂っていうか、本当のことなんだと思うんだけど……このサイトの、ちょっと奥行った、パス製の隠し掲示板にね……こういう、殺人依頼板があるんだけど、ほら」

指をさした、教えたい板の名前は『レッドフィフティーン』。

「赤……15?」

首を捻ったヌイ。少々目を細めて何もコメントしない翼さんと誇彦さん。そこでやっぱりエンだけが。

「赤い死神ってとこかな。ああ、なんか、分かったよ。うん。……書き込み通りに死ぬんだ」

「うん。そう」

発想力がすごいのか、そもそも知っていたのか。知っていて知らないふりをする必要もないだろうけれども。中央の決定ボタンを押して中に入ってみる。

「字だけだと、いまいち分かんないけれど……」

「確かに死んでるな。中には書かれてない人間もいるようだが」

そのURLを教えてくれないかと言われた私は、赤外線通信で誇彦さんの携帯にメールを送る。真っ黒の携帯だった。似合う。

「あとで、お前にも送っておくから」

「……」

笑顔でうなずいた翼さん。笑顔の似合う人だと思ったけれども、あたしはさっき見た。掲示板の中身を見ているときの、笑顔じゃない翼さん。いうなれば、仕事のスイッチが入っている翼さんというべきか。

「……まあ、という訳で、僕にあんまり係ると、いけない目に会うつていう話なだけだね」

「同じ家にいる時点で、もうそうだと思う」

他を巻き込むのがいやなら、最初からここに来なければいいのに。そう思った。

「だって、一人でいると、僕はいろいろ……世間的にダメ人間になっちゃうから」

肩をすくめて笑顔で言う彼。

「常識のある普通の人の近くにいないと」

なぜだろう。その言葉がひどく胸にささった。

普通は、つまらない。

.

05：狂愛者と窓枠

それは学校生活が始まってから、一週間かそこらした頃だったろう。授業が終わった直後、掃除の時間に入ってから、それは始まった。鳶えんは、それが自分がここに来てから、たぶん、来る前から続いていたのを知っていたが、実際に目にはしていなかったので、どんな行動も起こしてこなかった。

現在同居している、ルームメイトの一人、代四宮よしのみや 犬居いぬいは、俗にいういじめられっ子だった。

今日もクラスの男子生徒に、教室の掃除を押し付けられていた。

「……犬居くん、手伝うよ」

鞆たもとを持って帰りかけていた鳶は、掃除ロッカーから箒を取り出している犬居に声をかける。ビクリと震えた背中に、鳶は眉をひそめる。

「犬居くん。僕は別に、何もしないよ。君、今、どうせ裏切られるとか思ってるんだろ」

「あ……違うよ。…違う」

「どうかな。ここでこんな事になってるっていうのは、ずっと昔から、あの人たちとはあんな関係だったってことじゃない？ まあ、

精神的に全く成長しない人間もいるから、一概にそうとは言えないけれど、もう僕は高校の三年だ。誰かをいじめるだなんて、新しく始めるような歳じゃない」

箒を握りしめている犬居の横から手をのばして、自分も箒を持ちながら、鳶は淡々と語る。その表情は、いつもの様な笑顔ではなく、怖いぐらいの無表情だった。怒っているようにも、見えなくない。そう、初めて教室に入ってきたときのような、どの自分も曝け出していないようで、ありのままの飾らない自分の表情。

少し力強くロッカーの扉を閉めた鳶は、軽く犬居の肩を叩いた。

「僕はね、犬居くん。はつきりと助けを求めない人は助けない主義なんだ」

それは、はつきりとした宣言。突き放すわけではないが、手を差し出すなんてもつての他。自分から求めない人間には何も与えない。自分が求めるものは必ず手に入れる。それが、どんなものであっても。どんな手を使っても。

求められたなら、与える。求めたなら、与えられる。求められないなら、与えない。求めなければ、与えられない。

「キリストの教えにもあるんだよ。こういつの。……僕は、キリスト、信じてないけどね」

そうほほ笑んだ彼。犬居は不安そうな瞳のまま、教室の端から簞かけを始めた鳶を見る。昨日の事といい、先ほどの事といい、彼はたぶん、普通じゃない。気が狂っていると言っている訳ではない。ただ、凡人とはきつと違う。頭の中。思想。その他。

少しだけ、うらやましいと思いながらも、心のどこかではおびえていた。彼は強い。自分は弱い。自分は彼に、意図も簡単に負けてしまうだろう。そして、今と同じように、嫌な事を押し付けたり、苛立ちを発散させる的になる。

「やられたらやられっぱなしは、どうかと思うな。諦めるのは良くない」

教室の前の方から、少し大きめの声で言われ、犬居はまた肩を震わせる。掃除ロッカーの前から動かないままで。

「自分が弱いと思うなら強くなればいい。それでも弱いんだから仕方がないって逃げるのは、こうして生きている上では通らない言い訳だ。本当に逃れたいなら逃れられるはずだよ。でも出来ないのは、君が諦めるからだ。ただ我慢していればいいだなんて思っちゃってるからだよ。僕には分かる」

僕には分かる。絶対に信用できない言葉だが、どうしてだろうか。鳶に言われると、そう思えてしまう。

恐る恐る振り向くと、彼は、箒をかける動作をやめて、ゆっくりとしかし確実に、犬居の目を見た。じつと。頭の中まで見るかのように、少しの迷いもなく、真っ直ぐに。

「僕も、似たような状況だ。ただ、君は諦めても我慢すればすむ。でも僕は、諦めたら我慢する暇もなく死んでしまう。だから僕は強くなるし、死ぬ気で逃げる。それが、立ち向かって戦う」

「鳶くん……」

明らかに犬居とはスケールの違う話ではあったが、その言葉は確かに心に響いた。どこかで何かを感じたのは分かる。そして、嬉しい。

「助けてほしくなったら言ってよ。たぶん、僕は助けられるから」

「……ごめんね」

「別に」

先ほどよりも直接的に、言われ、犬居は謝罪の言葉しか出てこなかった。知らない場所にきて、不安なのは彼の方であるはずなのに、その彼に、自分が気遣われている。それが、済まなく思えてならない。

けれども彼は、鳶という少年は、あれほど犬居の心情を口にして

いたというのに、そっけなく一言を返しただけ。

「片付けようか。ごみ箱、そんなにごみ入ってないし。今日はいいんじゃないか」

いつの間にか、チリトリを片手にごみ箱の前に立っていた鳶は、蓋を閉めて、ロッカーを開ける。それから、元あった場所に、チリトリを戻して、ついでに犬居の箒も受け取って、自分のものとまとめてロッカーに突っ込む。明日開けた瞬間に倒れてきそうだったが、鳶はお構いなしに扉を閉めた。

それから、例の笑顔で。

「帰ろうか」

と、一言、言ったのだった。

その次の日だ。週代わりの掃除当番。昨日犬居に掃除を押し付けた男子生徒が、掃除ロッカーを開けた。瞬間、箒が倒れかかり、思いきり彼の頭を打った。よく彼と一緒にいる男子生徒達が、何やら犬居に話しかけていた。

それを横目で見ながら、鳶は小さくため息をついて、本を片手に教室から出る。図書室に本を返しに行くためだ。その時、犬居の前を通ったが、彼は鳶を見上げることも、声をかけることもなく、ただじつと席に座っていた。その時点で、何かがおかしい思ったが、鳶は何もしない。

「……………忍耐力あるなあ」

鳶が持っていた本は全部で三冊。『裁縫の心得』和服編』と『快樂殺人の心理学』、それと『すぐに役立つ護身術』。

校舎と校舎の間にある、湿った暗がり。そこは誰も通らないし、校舎側からも、窓がないので見えない、いわば視覚。

「昨日の掃除、お前だったよな？ あれ、なに」

「あ、あれは……」

あれは、昨日掃除ロッカーに掃除道具をしまった時、たまたま…… たまたまそうなってしまっただけ。故意にはないし、そもそも犬居自身が自分でしまったわけでもない。

けれども、彼はこういう場面において、怖気づいてしまう。言いたい事を、言わなくてはいけない事を、口にすることが出来ない。

「調子乗ってんじゃないの？ 編入してきたやつ…… 斜透字だったのとつるんでるじゃん。」

がし、と襟を掴まれて、犬居は相手を見上げて硬直したのだが。

「僕と仲良くしちゃいけないとか…… 君に決める権利はない」

その彼の首根っこを、件の鳶が掴んでいた。一斉にその場にいた全員がそちらに顔を向ける。

「教室に犬居くんの鞆あったから……それに下駄箱、内履き置いてあったし。こういうこととする場所って、大体は、ひと目につかないとこだよな。入学するときに学校の周りも一周させてもらって、適した場所は三か所あったけど……まさか、一発で当てれるとは思ってなかった」

大丈夫、犬居くん。そう微笑んだ鳶に犬居が頷くのと同時に、彼を掴んでいた手の力が緩む。

「慶永くん……^{よしなが}だったっけ？ 君が行ってるロッカー、やったの僕だよ。しかもちゃんと頭に当たるように、一本目が避けられても当たるように時間差つけてたんだ。まさか二本とも当たるなんて思いもしなかったよ」

くすくすと小さく笑いながら、犬居が解放されたのを見るなり、鳶は慶永の首から手を離す。

「転校生……お前もちよつと、調子乗ってんじゃないか？」

「編入生だよ。僕は調子乗ってない。この程度で調子に乗ってるといわれてしまったら、警察の人たちだって調子に乗ってることにな

る。悪い人からいい人を助けるのは当たり前のことだよ？　ともすれば、調子に乗ってるのは君たちの方だ」

高校生にもなつて……とつぶやいた鳶を、慶永らが囲むようにする。囲むといっても、逃げ場がないわけではない。ただ、犬居のいる方向には行き辛い形にはなっているが。

立ち上がった犬居。しかし、彼は鳶を助けることが出来ない。膝が笑ってしまう。どうしても、怖いという感情がぬぐえない。それは、きつと、小学校からのトラウマ。体がそう覚えてしまったのだろつ。

そんな犬居の心中を察してか、鳶は殊更、柔らかな笑みを彼に向け、余裕をアピールする。

「へらへら笑ってんなよ。女みてえな顔しやがつて」

慶永ではない、他の男子、蓮田^{はずだ}が鼻で笑ってみせる。が、鳶はそれを否定せずに、逆に肯定して見せた。

「そうでしょう？　僕が綺麗過ぎるから、死神に付きまとわれてるんだ」

「冗談めかして顔に手を添える鳶だったが、事実なだけに、犬居は笑えない。

逆に大声で笑った慶永や蓮田達は、笑いやむと同時に、実力行使に出た。一人目が拳を鳶に叩きつけようとした瞬間、彼の眼が温度を失う。瞬間、その拳が止まる。

何がどうなったのか。そう、鳶の足が、彼の鳩尾に入っていた。

「相手が次にどうするかとか考えないから、そんな無防備になるんだ。自分が優位だと思わないことだね。常に有り得ない場合も想定して行かないと」

と、犬居を手招きで呼んだ鳶。犬居はおびえながらも、足早に鳶のもとへ行き、情けないがその背に隠れた。鳶は苦笑したようだったが、そうでなかったら、そもそもいじめられて等いないだろう。

「くるなら、まあ……どうぞ？」

言いながらも、犬居は鳶に背を押されて、校舎内へと戻るようにせかされる。その時、鳶自身も彼らに背を向ける形になる事に、犬居は恐れを感じた。彼らは背後から狙うことは厭わない。けれども鳶はいいと言う。

そして案の定、湿った砂利を踏みしめる音が聞こえたのだが。

「ありえない場合も、想定しないとね」

視界の正面には、そう言って笑った鳶の顔。そして視界の端には、屋上から落ちてきたであろう、ひどく錆ついた、朽ち欠けの鉄柵。それに驚いて尻もちをついた、慶永と蓮田。

「鳶……くん」

「僕には女神がついてるんだ」

その笑顔は、本当に真っ白だった。

家に帰りついてから、犬居は口夕に氣遣われ、水脈みおに掌の手当を
してもらっていた。鳶はキッチンに立っている。

「いたっ！」

「我慢なさいよ、これくらい」

思いのほか、消毒液がしみて、肩を跳ね上げた犬居に、水脈が眉
をひそめる。逆に口夕はフンフンと鼻を押し付けて、彼をばげます。

「ありがとう、口夕」

思わず座り込んだ時、地面に手をついてしまったのだ。そこに運
悪く、とがった砂利があったようで、帰り道、鳶に言われるまで、
その傷には気がつかなかったのだが、垂れるくらい血が出ていた。
傷口は小さいが、どうやら深いらしく、手全体が痺れたかのように
傷んだ。

そんな犬居に、キッチンから鳶が声をかける。

「大丈夫？」

「あ、うん。大丈夫……ちょっと痛いけど」

ガーゼをテープで留めてから包帯を巻いてもらっている犬居は、どうとも言えない笑みを浮かべて返事をする。

夕飯の準備ができたようで、大皿を手に、リビングに来た鳶は、犬居の手を見る。苦笑する犬居と、相変わらず警戒しながらこちらを見ている口々、それと救急箱をしまっている水脈。

「ミヨンちゃん、包帯巻くのうまいね」

言っと、慣れてるから。という短い返事だけが返された。彼女も相変わらず、余り会話はしない。尋ねれば返ってくるという程度だ。鳶にしたって、進んで話しかける方ではないので、住人が三人もいる割に、この家の会話は少ない。

けれども、仲が悪い訳ではないので、喧嘩もない。今だって、無言ながらも、水脈も犬居も夕飯の準備を手伝ってくれている。今日の担当は鳶。結局、担当を決めても、全員でやっているようなものだ。

と、ここで初めて、犬居は鳶の左の薬指に気がついた。金色のリング。

「あれ、鳶くんって……そういうのやってたっけ？」

自分の席に腰掛けながら、犬居は特に何の意図もなく尋ねる。隣で水脈が、ホントだ、と言ったのを聞いた。

鳶は、ああ、と自分の薬指を見て、笑みをこぼす。

「今週の初めごろから。やっぱり初日からつけると、たぶん先生たちもうるさいだろうから。本当はつけてたかったんだけどね」

「お守りかなんか？」

そういった類のものを常に身につけている水脈に言われ、鳶は少し迷いながらも、似たようなものだ、と答えた。けれども、指輪で、しかも薬指となると、違う意味も出てくる。けれども、あえて言わずに、犬居は手を端に伸ばした。

「じゃあ、いただきます！」

今日の放課後の事など、忘れてしまおう。夕食の前、犬居は常になそう思っ、そして忘れられるようになっていた。それが日課になっってしまうほどに。

犬居は、その日初めて、誰にも絡まれなかった。けれども、後悔していた。

自分の代わりに、鳶が。

「え、鳶くん」

「ああ。ずいぶん幼稚なことするよね。彼らの精神年齢を疑うよ」

鳶は常日頃から、机の中に物は置いていかないし、ロッカーだって使わないような物しか入れていない。いたずらをされて困るものなんて置いていないからこそ、机と椅子、その物に被害が及んだ。

「……糊とか。気付かないで座ったり、物置いたりすると思ったのかな」

鞆を窓際に置いて、鳶はさっさと教室を出て、バケツと雑巾を片手に戻ってきた。バケツに入っているのはお湯だ。

「朝から掃除か？ ご苦労さん」

ニヤニヤ笑いながら慶永と蓮田が見にきた。鳶は素知らぬ顔で雑巾を絞って、言った。

「僕、潔癖症でさ。重度の。汚い所、嫌いなんだ。とても不快だ。別に、糊自体はいいんだ。だって工場で詰められて店頭に並ぶんだから。でもこうなる工程が、吐き気がするほど汚い。僕の机に誰かが触ったって言うのも嫌だ。この糊を買ってチューブから絞り出したって言うのも嫌だ。……ほんと、汚い」

君たちが。最後のは口を動かしただけ。終始、笑顔でいるのが、彼らには恐ろしく見えたのだろう。何も言い返さずに、行こうぜ、と教室からすら出てしまった。

犬居は鳶を手伝うべきか否かを迷って、結局手伝うことにした。

「あの、僕、触っても大丈夫？」

「ああ、いいよ。犬居くんは、その他大勢じゃなくて、友達だから」

「？……そ、そうなんだ。何か、嬉しいな！」

安心した様子で、机を拭きだした犬居に、鳶は小さく笑みをこぼした。

彼は本当に疑うことを知らない。自分一人で不安になったり、がまんしたり。誰かのせいにするということを知らない人間だ。ここまで白い人間と出会ったのは初めてで、何だか絶対の信頼を置きたくなる。こんな気持ちは初めてだった。

「ここまで拭けば大丈夫だと思う。さすがに机の裏とか中にまでは、糊、塗っていないみたいだから」

「この糊、どれくらいしたんだろうね」

「さあ。でも結構無駄遣いしたんじゃないかなあ」

別についていく必要はないのだが、犬居はバケツを片手に廊下に出た鳶について行った。チャームがもう直くなるが、一人で教室に戻るより、二人で教室に戻ったときの方が、先生に対する言い訳のしようがある様な気がした。それに、一人で教室にいるよりも、鳶と話している方が、当たり前だが断然楽しいから。

そして思ったとおり、犬居と鳶、二人で教室に戻ったとき、担任は何も言わずに、ただ席に戻る事をせかしたただだった。バケツをロッカーに放った鳶を、少し注意した程度で。鳶も犬居も、小さく笑って席に着く。

ただ、慶永と蓮田が、面白くなさそうな顔をして、互いにうなづきあっただけが、気になった。

授業が始まって、終わって。一回目の休み時間は何もなかった。それを三回と、四時限目までは、何事もなく終わったのだが。

昼休みに入って、昼食を取り終わった後だ。

鳶はいつものように席に座って、退屈そうに本を読んでいた。犬居も、自分の席で、今日出された宿題を片付けていた。

「斜透字」

そう声をかけてきたのは、慶永。鳶は視線だけを彼に向けて、それだけでまた本に視線を戻す。返事も何もしない。甚だしいほどの無視だった。

馬鹿にしているとしか思えない鳶の行動に、慶永の顔色が、みるみる赤くなる。顔には怒りをこまかすためか、笑みが張り付いていた。それでも鳶は何の行動にも出ない。変わらずに本を読み、ペーシをめくって、視線で字を追ってゆくだけ。

「斜透字！」

バン！ と机をたたかれ、漸く顔を上げた鳶だったが、慶永を見ているのは彼だけではない。犬居は当然のこと、教室に残っていたクラスメイトも驚いて、そちらを見る。一気に教室の温度が低くなり、そして静まり返る。

無言の鳶。見透かすような目で相手を見上げて、観察し、そして次の行動を読む。性格や気性、今までの行動などから、大体の予想はできた。

「僕に何の用。僕、本読んでるんだけど」

「あつそう」

と、言うなり、いきなり鳶の襟首を掴む。

行動するよりも、口で言えよ。鳶はそう思いながらも相手を睨む。同時に、慶永の向こう側、後ろの方の扉から、教室に戻ってきた蓮田の姿が見えた。

そこで鳶は眉を寄せる。面倒くさいことになりそうだ。

「マジで、お前つざい」

「僕の事気にするからだよ。空気だと思って」

「それがウザい。何様？ もうちよつとさあ、考えた方がいいんじゃない？ お前、後から来た奴じゃん」

「来たくて来た訳じゃない」

ぐ、と自分を掴む慶永の腕を掴んだ鳶。その左手に光る指輪を見て、蓮田が横から口を出した。

「は？ 何それ。ここガツコだぜ？ そゆの校則違反じゃねえの」

「そうだけど？ あんたらには関係ない」

怒った。犬居は席から立ち上がる。今、鳶は明らかに苛立っていた。だって昨日、自分がその指輪について尋ねた時は、そんな風な反応はしていなかった。

それに、あの指輪は、彼にとっては大切なものらしいし。

「校則違反知ってやってやるのって最悪」

そう言った蓮田を鳶が今までにない表情で睨みつけた瞬間。

「没収！」

「……」

慶永が素早く鳶の指ごと引っこ抜く様に、金のリングを指から抜き去った。しまった、と思ってももう遅い。そしてそれを見ていた犬居は、息をとめた。早く返してやってくれ。そう思った。

「返せ！」

慶永に掴みかかった鳶だったが、それよりも速く慶永は指輪を蓮田に投げる。そして受け取った蓮田はそれを持って教室を走り回り、鳶に追いつかれそうになったら慶永に渡す。

しかし、鳶は見た目ほど体力がない訳ではないし、頭の回転だって速い。だから、確実に慶永と蓮田の動きをとらえ、そして先回りし始める。

そして、慶永にリングが渡った瞬間、鳶の手が、慶永の肩を掴んだ。そして掴まれた慶永は、驚きと意地のあまり、やってはいけないことを、やってしまった。

「くそ！」

慶永は渾身の力で放り投げた。金の指輪を、窓の外へ向かって。

「チミ！！」

そう叫んだ鳶。そして教室にいた誰もが、それを見た。慶永を突き飛ばし、一直線に窓に走って、そして窓枠に上がったと同時にそこを蹴って、窓の外へと飛び出した彼を。

ここは、三階。

「鳶くん！！」

叫んで窓の下を見た犬居は、驚くと同時に息をつく。

そこには立ち上がった鳶の姿と、彼の下敷きになってやったのか、スーツの腰元を叩きながら、携帯で誰かと連絡を取っている誇彦（トウケン）の姿があった。そして、教室の扉が開かれ、ツカツカと歩いてくる一人の青年。彼もスーツで、首にはバンドが巻いてある。

「翼、さん。……あの、どうして」

教室を見渡して、それから窓の外を覗いて、下の誇彦にOKサインを出した翼は、学生証のサイズのパスを見せる。それはこの学校での証明書だった。

そして、口をパクパクと動かした後、気づいたのか、携帯をいじり始める。そして、次に犬居を指さして、携帯を指さした。

「？」

よく分からないと言った様子の彼に、翼は困ったように苦笑して、次は口と指を合わせて、ゆっくりと言った。『きみのけいたい』と。

それで漸く分った犬居が携帯を見ると、丁度メールが届いたところだった。

『僕らは警察で、鳶くんは保護要因だから、学校に許可をもらって、警護させてもらってるんだ』

メールに書かれたことを読んだ犬居が顔をあげると、翼は笑顔で頷いて、それから自分に視線が集まっていることに気がついて、気恥かしそうに教室から逃げる。小走りで廊下の向こうへ行く足音を聞きながら、犬居ははっとして、たぶん翼と同じく下の階へと向かう。

玄関に着くと、そこには内履きの底をマットに擦りつけている、
鳶の姿があつた。

「鳶くん、大丈夫……？ 保健室…保健室行こう！」

「いいよ」

「駄目だ、鳶。学校側には言っておく。保健室に行け。嫌なら帰れ」

「じゃあ、帰ります」

「ぼ、僕も！」

「……二人分、言っておく」

そして授業が始まるまで保健室にいた二人は、翼に荷物を持ってきてもらって、授業が始まってしばらくしてから帰った。後日、学校に来てみても、どの教科の教師にも、何も言われなかった。

それが逆に不安で、犬居はびくびくしていたのだが、鳶はそれを笑う。そこまで気を使ってやる必要はないんだと。

.

06：死神家のジキルとハイド（前書き）

いつもより、後半グロがあるかもしれません

06：死神家のジキルとハイド

その少年は今日もまた、自分で自分の傷の手当をしてから、死神のもとへと向かう。

「何やってんだか……っすね」

鞆を背負って、無理矢理ベッドに縛り付けてきた母親を放っておいて。

自分をも殺そうとしてくる女に向って、それでも彼は母さんと呼ぶ。叫ぶ。ベッドに縛り付けるなんて、ひどい事をして、彼は彼女を殺すなんてことはしない。どこかで、期待している。自分を産んで育ててくれた人が、また、家族三人でいた頃と同じように、優しくなってくれることを。

帰ってきたら、また、笑顔で迎えてくれることを、どこかで期待している。

「あ、おかえりなさい」

「どもつす」

勝手に上がりこんだ家のリビングには、一人の少女が。乃選^{のえる}だった。遠夜^{とあや}がデコレーションをした携帯をいじって、ノートパソコンを開いて。乃選は小さく手を振る。

「あれ、名鷹さんは？」

「お仕事中です」

「へえ」

自分の指定席となったソファーに寝転んだ遠夜は、学ランのボタンをはずして、ぼんやりと天井を見上げる。白い。明るい。真っ暗な自分の家とは大違いだ。

「あ、あの…ココア、飲みますか？」

そういえば、今まで二人きりにはなかったことなかったな、と思いながら、遠夜はうなずく。乃選は小さく笑うと、キッチンの方へと消えてゆく。

ぼんやりとその背中を見送った遠夜は、腕に手をやる。深く重く痛む腕は、包帯で押さえつけられている。

ここまで本気でやられたのも久しぶりで、遠夜はこの傷と同じくらいに、深く傷ついた。目をつむっただけで、その瞬間を思い出せる。何と言われたのかも、思い出せる。彼女が自分ではなくて、過去の人間を思い出していたのもわかる。でも、自分という、その息子の自分を置いていけずに、結果的にこういう行動に出たというのもわかる。だから。なお。

「もっとガキだったら、素直に殺されてやれたのに」

今更。殺されてやるなんてことはできない。痛みの中で、じわじわと死んでいく勇氣は、ない。

「……遠夜さん、あの、「コア」

「……っす」

今の、聞いていたろうか。困ったような笑顔でカップを渡された遠夜は、起き上がって、それを受取る。受け取って、自分の隣に腰かけた乃選と距離をとる。

「今日は、元気ないですね」

「……っすね。ちょっと、や、結構マジでへこんでるっす」

「テストの点数悪かったですか？」

「や、そこら辺は、名鷹さんに教えてもらってるし、元から悪い方じゃないんで」

そうなんですか？ と意外そうに首を傾げる彼女に、遠夜は軽く笑う。結構失礼な反応だね、と思いながら。乃選は見るからに頭がよさそうだ。けれど、それを問うた時の彼女の答えは意外だった。

「私、そういう勉強は一切してこなかったの……よく分からないんです。テストとか、試験とかは何となくわかる程度で」

「どんな生活してたんすか……」

と、ココアをすすりながら遠夜が言ったときだ。丁度、名鷹なたかが返ってきた。真っ赤なコートに、鮮やかだったであろう、赤黒いシミをこびりつかせて。リビングに入ってくるなり、彼は手に持っていた刀と、銃を床に落として、ガックリと膝を着く。

「ちよっ！」

「名鷹さん！」

慌ててカップを放り投げて名鷹を受け止めた遠夜と、駆け寄った乃選。大きく息をついて、名鷹は第一声にこういった。

「疲れた……」

と。見る限り外傷はないし、触ってみても変な感触はない。本当にただ疲れただけのようにだったが、どうしてここまで疲れるようなことになったのかが分からない。

「と、とりあえず、この無駄に重いコート脱いでくださいって」

「脱がせて」

「はい！」

「……乃選、俺やるっす」

「遠夜は……俺を脱がせたいのか、この変態」

「ち、違うつす！ 断じて！！ こんな重いコート、乃選が持てるわけないっすから」

腕の一本一本を袖から抜いて、コートを持った遠夜。その表情が僅かに曇る。それを見ていたのは名鷹で、名鷹はそこから遠夜がコートをコート掛けに持って行くまで、そこから腕を上を持ち上げるところまでを見ていた。

重いコートを、腕の力だけで持ち上げた時、確かに遠夜は齒を食いしばった。僅かに顎が動いたのが見えた。

「……俺も疲れたけど、どうなんだよ、リス。お前さ、結構しんどいんじゃない？」

「何言ってるすか」

「じゃあ、俺のこと、引つ張り起こしてくんない？ 左の手でさ」

ん、と片手を伸ばした名鷹の手を、嫌そうにしながらも遠夜はとって、名鷹を立たせようと腕に力を入れた。そのタイミングを見計らって、名鷹も自分の方向へと腕を引く。その時にかかった負担。

遠夜は包帯がずれるのと、頼りなくだが塞がりかけていた腕の傷が、また引き裂かれるように開いたのを感じた。

痛くないわけがない。

「以外と、意地悪いっすね……」

「お前が強情なだけだったの。見せてみるよ。腕。脱げ脱げ」

「変態……」

学ランを脱いで、ワイシャツの袖をめくろうとした遠夜の手が止まる。どれだけ頑張って袖を幕上げても、傷を見るには無理な体勢になる、と思ったのだらう、彼はボタンに手をかける。

「ワイシャツの下、なんも着てねえの？ チャレンジャーだな」

「……そっすか」

けれども、実際は、そんなの関係なかった。

「あの、どうしたんですか、その……」

少し顔を赤くしながらも、乃選が尋ねる。

遠夜の体には、無数の傷跡があった。新しいものも古いものも、いたるところに沢山。今は、打撲と、腕の包帯が目立つ。包帯の方は、赤いものがにじみ始めていた。

「……万能鋏？　ずいぶんマニアックな感じの凶器だな。誰にやられたよ」

疲れた、とあそこまでアピールしておきながら、名鷹はけろっとした様子で遠夜の傷の具合を見て、手当をし始める。されるがまま、黙っている遠夜は、溜息をついて、答える。

「母さん……っすね」

「そうか」

いつから耐えてるのか。たぶん、小学生の時から、もう耐え始めていたはずだ。自分が出来て、それから何年かした後、両親が結婚して。母の方は未亡人で、父はそんな母と知り合って、結婚した。彼女には既に息子がいて、結婚したら、兄ができると言われてきた。

言われてきたけれど、結局、二人が結婚して、戸籍でも自分の両親となったのに、家族となったのに、その家族には、遠夜の兄たる人物はいなかった。

その時は、まだ小学二年。兄はいないのか、と尋ねると、父親はそうだったかな、と取り繕った笑みでこたえ、母親はそこから逃げるように、別の部屋に行ってしまった。それから、その話には、触れないようにした。

それから三年。父親が事故で死んだ。殺されたと思っていてもいいような死に方だった。信号が青になったから、だから、発進しただけ。それだけで、父親は命を落とした。信号無視をしたトラックに突っ込まれて。

それからだ。母親がおかしくなったのは。

自分の知らない誰かの名前と、父親の話。それが聞こえたら、気をつけなくてはいけない。気をつけるといつても、ただ受け止めるしかできないのだが。……受け止めきれているとも、言えないけれど。

「……」

しょぼん、と落ち込んでいる様子の遠夜に、乃選はオロオロとします。名鷹は包帯を新しいのに替えて、専用の金具で留めてやる。

それから、遠夜が放り投げたであろうカップと、こぼれたココアを乃選と一緒に拭いて、彼に新しくココアを作ってやる。そして今

度は、乃選と遠夜、それから名鷹の三人でソファに座る。

「俺さあ、こうしてみんの夢だったかも」

「は？」

「乃選が妹だろ、お前が弟で、俺が兄貴」

「……兄貴っすか」

「そそ。じゃあ、俺の家族構成を暴露してやろう。両親と兄と妹がいた！」

過去形。

「わ、私は……誰がいたか分かりません！」

不明。

「……俺は」

詰まる。

「俺は、母さんがいて、父さんはいなくて、兄さん、居たんだか居ないんだか」

そう、母親が呼ぶ名前。『徹』

彼女は、自分を見て、その名前を呼ぶ。徹、と。自分がその、たぶん兄に似ているのかは全く分からない。けれども、彼女にとってはそのなんだろう。同じ、息子であるんだから。

「おれ……」

なんだか、泣けてきた。

「おれ」

何が言いたいんだろう。

「どうした、リス」

ポンポンと撫でられて、その頭を肩に押し付けられる。名鷹は、いったい何をしたいんだろう。

「……リス、俺には兄貴がいたんだ。その兄貴ったら、もう、見てらんねえくれえ、まあ、おれがこんなだからそうなのかしんねえけど、やることなすこと、酷い奴でさ。でも」

と、一呼吸置いた。

「俺と妹、守るのに、親父殴ってくれたんだ。その後散々な目にあって、どっちだったかな、片手の、薬指か、どつか、神経切れちまったらしいけど。でもま、そんな感じ」

「……」

それから、彼は続ける。

「で、さ。お袋はお袋で、俺と妹捨てて、兄貴だけ引っ張って出て行っちゃうし……妹は妹で、親父に殺されちゃうし」

向こう側で、乃選のうるたえる気配を感じた。少なからず遠夜の動揺はしている。けれども、たぶん、乃選ほどではない。彼はいま、そこまで話を真剣に受け止めてはいないから。

「だから、俺は、親父を殺した」

「……」

「そんな時、兄貴が来てさ。俺のこと、警察に突き出すつもりなら、殺してやろうとも思ってたけど……は、あの兄貴、俺のこと連れてったんだ。それで、自分が今から殺そうとしてる奴らんとこにつれてったんだ。誰だったか……俺があつたの、そう……翼。翼兄ちゃん、あと、徹兄ちゃん」

「とおる……」

「そ、お前の兄貴」

「おれの……」

おれの、あにき。とおる。徹、兄ちゃん名鷹の兄が、殺そうとした。徹。……徹。

「そ……っすか」

ぼっん、と出たのはそれだけだった。そして、不思議と思う。

そうか、兄は死んでいたのか、と。

死んでいるのは知っていた。仏壇があつて、写真があつたから。だが、何故か実感がない。どうしてか実感できない。けれども、漸く分かった。

兄は、死んでいる。

「お、帰んの？」

「ちょっと…行ってくるだけっす」

「……そ。まあ、頑張れよ」

ワイシャツと学ランの上着を持って玄関先に向かう遠夜に、名鷹は笑いかける様に問うた。

これからどうなるのか分かっている笑みで、出ていく遠夜を見送っていた。

玄関は薄暗い。廊下も薄暗い。階段も居間もキッチンも風呂場も

トイレもどこもかしこも。

薄暗い。だから分らない。

「……」

嫌な汗が浮かんでいる。空気が重く湿っている気がして、遠夜は浅く呼吸を繰り返す。

ある一つの部屋の前に立ち止まって、ドアノブに触れる寸前で、行動を止めている。

「やるのか…やるのか、俺。明確な理由なんて無いぞ。ただ、流されてるだけじゃないか……落ち着け、考えろ。やるのかじゃない、やれるのか。本当に、俺は……」

やれるのか。

躊躇している心。無理なんじゃないか。無理だ。

何かを探すようにさ迷う視線と、伝う汗。だが、一瞬感じたのは、濡れたような冷たさだった。

「大丈夫だよ…やれるよ」

思ったことを口に出す。右手がヒンヤリとした。耳の奥で水の中を泡が泳ぐ音がする。

「やれるよ……やれる」

掴んだドアノブは、鉄の冷たさだったが、それでも頭はすっきりした。

がちゃ、と開けると、ベッドの上には、何かが乗っている。何かが、乗っている。

目をつむっていて、微動だにしない。全く動かない。寝てるのか、死んだのか。

「まだ何もしてないよ……」

右腕を振り上げる。

「これからするんだ」

右腕を降り下ろす。

「信じてたのに」

バシャン、と音がした。水面に叩き付けたような音が。けども、実際は、皮膚を裂いて内臓を断つて骨を砕いただけだ。

「信じてたのに……おかしいな。信じてたの、俺だったのに」

振り上げて降ろして振り上げて降ろして振り上げて降ろして振り上げて降ろして振り上げて落として。

赤かった。腹部だけがグチャグチャで、他は綺麗に残っている。腕も足も首も顔も。そう、顔も。

何と無く、母親の顔に視線を向けて見ると。

彼女は目を見開いて、遠夜を見つめたままで絶命していた。

「……あ」

目を見て、そらせなくなつて。我に返った遠夜は、右手の物を見て、投げ捨てる。だが、それから上ってくるようにこびりついた血で、右手は真っ赤だった。

右手の物とは、昔アウトドアで使っていた、あの赤い小さい斧の様なもの。

「屍餅をついて、壁ぎわまで逃げた遠夜は、ゴシゴシと右手の血を拭う。目は彼女と合ったままだ。そんな訳は無いのに、自分の位置に合わせて首を巡らせている気がする。」

「はあ、はあ…はあはあはあ」

血が取れない血が取れない血が取れない血が取れない血が取れない…。こっちを見ないでくれ。お願いだから見ないでくれ。俺がやったんじゃない。俺はやれない。俺は怖かった。俺にはやれなかった。だけど誰かが言っただ。

「大丈夫だよ、やれるよ」

そう言った奴がいるんだ。気持悪い。ベトベトするドロドロする。吐きたい。吐き出してしまいたい。俺じゃない何かが腹の中にいるんだ。飲み込んでしまった何かがいるんだ。

「う、うえっ…ぐ」

涙が出てきた。自分を掴もうとする何かが、息を止めようとする。ずっと見つめあった母親と、目がそらせない。あの目が自分を捕えようとする。引きずろうとする。

見たくない。行きたくない。触りたくない。

「じゃあ見なきゃいい」

視界がいきなり揺らいだ。それから段々と周りが見えなくなつてゆく。目を閉じると、濡れたようなヒヤリとした感触が感じられた。

熱が出たときに、濡れたタオルを置かれるように。優しく目隠しをされたように。

「見えないように、してあげる…家に帰ろう」

見えないはず。けれども遠夜は立ち上がり、ふらふらと部屋から出ていった。

そして遠夜が行方不明だとリストに載った日。同時に彼は、殺人者として追われる身になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6612e/>

絆3 ~ 禍束編 ~

2010年10月8日23時46分発行